生憎芳澤公使は歸朝中で堀參事官に會ひ、色々と有益な話や駐支外交官の苦心談を聞き、創設以來幾多の政變兵變の時、皇帝や要路の大官連の避難所となつたので有名な公使邸や、殉職公使館員の墓等を案内にあづかつた。外國ではあり乍ら、而も日本帝國に等しい此の區域は、我々日本人にとつて何とも云はれぬ懐しい所であり、又幾多の同胞の流血の苦心を偲ぶにつけても、愛國心が自づと湧き出るやうだ。公使邸の御眞影室に通された時、云ひ知れぬ緊張味を覺えたと同時に、事變に遭遇して館員一同室に集つて最後の奉仕をすることを考へると、自づと我もその一員となつたかのやうに悲壯な感にうたれる。

支那人の學校參觀の手續きを依頼して辭した。門を出づれば守護の歩哨に云ひ知れぬたのもしさと、心强さを感じた。若し事變となつて、支那兵の劍でつかれても、決して此胸板を破られる事はあるまいと思ふ位だ。

自動車を列ねて西郊萬壽山に向ふ。例によつて灰色の埃はお話にならない。後塵を拜する人こそ實にお氣の毒だが致し方がない。よく内地でも自動車に乘るときと歩むときとによつて『便利なものだ。』と、『やつかいなものだ。』との正反對な感情を抱いたが、支那ではそのひらきが更に大きい。しかし乘つてゐても左程優越權も味へぬ。といふのは道が悪いため人間の身體は天井と座席との内をはねまわつてゐるからである。

兎も角も郊外へのドライブである。坦々たる大道を疾驅すると云へば聞えがよいが、その實は運轉手は人を乘せてゐると云ふ樣な事を考へずに快々的に走るのだからたまらない。公使館で聞いた紅卍字教の事や長城の遺跡の樣を色々と想像を廻らして、その見學を決行し得ない事を殘念に思つて居たが、何時の間にか動搖のために忘れて了つた。

燕京大學を右に見て少し行くと目的地なのだ。その附近には『勿忘國恥』

とか何とか色々な文句が壁に大書してあるのを見受ける。これ相當やかましかつた例の二十一ヶ條についての排日運動の殘りである。實に大規模に廣告してある。『流石は支那だ、實にうまい。』と竊かに讃辭をあたへたので、一同に苦笑された。國恥を見せつけられても、旅行者には一種の宣傳遊戯としか見えないのだ。針小棒大の大人國の常套手段としか受取れないのだ。よつてその云はんとしてゐる意味よりもその文字の形に讃辭をかけられるのである。形式的な煽動であつたゝめに、自づとその心が、現れてゐるのかも知れない。

扨て萬壽山の内部へ入ると聞きしにまさる立派なものである。西太后が國防の費を用ひて老後の避暑離宮としてつくつたゞけあつて、さながらお伽噺の國にゐるやうな氣がする。滿々とたゝへた大池、池に映ゆる幾多樓閣の青丹の影等は、東方の島國の者には考へも及ばぬ結構であり、昔時の

様を想像するだに夢の様な氣がする。奈良朝の昔、これに類する様な大國式な色彩濃かな王都を見て歸つた留學生が、我國に『青丹よし奈良の都』を建設したのも確かにその心情の一端を汲取る事が出來る様に思はれる。

この支那氣分の中にあつて國旗辨當に腹をこしらへてから、大理石の長い廻廊を歩んで見物に廻つた。歩むにつれて益々驚かされるのは、廣大な樓閣や廊下等が、その一壁一柱に至るまで、極彩色を以て彩られ又彫られてある。嘗ては一里にわたる大池の周圍を巡つてあつたと云はれる廻廊の如きは、その欄間の繪を全部違へてあつたと云はれ、又青赤の硝子をはつてある船窓の様な燈籠は、一時に點火されたものだと云ふことである。その中を泰平を夢み乍ら、多くの美人に從はれ、三寸の蓮歩と衣ずれの音以外には何の雜音も知らずに暮した人は、如何な氣持であつたらうか。又聞く、此の地と北京の北海とを隧道にて連絡してまさかの時に備へんとした

といふ話を。愈々女傑の想念に驚かざるを得ない。しかも一歩王宮外の民は全く衣食住の自由さへなく、灰色の内にうごめいてゐたのではないか。此の宮廷内の人々には宮外の人民は人間として見られなかつたのであらう。此處にも同じく專制的貴族榮華の文華の名殘を見るのである。而も貧民增加は近代科學の進歩に伴ふ衞生設備の普及に原因するもので、昔は貴族階級多かつたと云ふも、今日の支那に於ける衞生設備を以てすら、此の大衆なのだから、昔も定めし多かつたのだらう。支那三千年のあの立派な文化も獨り貴族の或一部の者の所産で、所謂大衆のあづかり知らなかつたものであつたらう。榮華の夢は北清事變により破られて、今は旅人を驚かす以外には何も役に立たないらしい。而もあたら美しい樓閣も度重なる革命毎に、はりつけられる巾廣い封鎖標によつて、觀音樣の繪馬堂以上に汚され、且つ内部の結構もうかゞはれない憾がある。武人の獨り天下と思はれる今日には觀賞的に取扱はれないのも無理はない。建築としては惜しいものだが民の膏血を搾り取つて出來上つたものだから、此の樣に荒されるのも據處のある事だらう。

石舟や行宮にのぼつてしばし王者を味ひ、あられもない思ひをはせたが長居は無要と早々辭去する事にした。

例によつて埃の中を走れば、至る所の電柱に赤十字の廣告が出てゐる。これは紅卍字教の慈善事業の一つなのだ。支那の軍隊は烏合の衆で、浮浪人をかり集めて兵隊とする。而して大した練兵もせずに、出征させる。戰爭と云つても兩軍共あまり死傷者を出さないそうだが、萬が一傷病兵となつたものがあつても、費用をかけて治療するよりも見殺しにした方が經濟的なのだそうな。されば此の赤十字の行爲も彼等に取つてはたしかに有難

いに違ひない。紅卍字教の人氣は或は此の様な事も影響してゐるのではなからうかとも思ふ。

やがて孔子廟へと着いた。思つたよりわかりにくい道を曲り曲つて來た様だ。内地であれば屋敷町の裏の様な所に漸く發見した、と云ふよりも漸く車より下りる好機に出遭つたのだ。流石孔子様の國である。昔からその聖德をたゝへる爲に、歷代の皇帝が一個宛獻納したのだと云はれてゐる碑文が、數へ切れぬ程兩側に行列してゐる。仲々名文も多いそうだが、ゆつくり味ふ暇と根氣とがなくなつてゐる。大きいもの、小さいもの、浮彫の素的なもの、色々取交ぜてあるやうだ。曲阜の孔子廟は此の幾倍も立派であり、碑もずつと多いと聞かされたゞけで、感心する事又一入だ。支那風と思はれる朱塗の堂宇も立派だ。昔帝政の盛なる頃には、此處も樞要な官吏養成の學校だつたそうだが、今は例により蔓は草まめしだし、參拜する人影たえて『此處にも見ゆる秋の色。』とでも云ひたくなる。

炎天を冒して更に近くの雍和宮といふ喇嘛寺を訪れた。

先づ半ば朽ちた門を入る所はよく京都邊の郊外に見受ける名刹の第一門をくゞる様な感だ。何故ともなく太奏の方廣寺を思はれた。昔時の信仰の形のみ守つてゐるのかと思ふと、哀れにも感じたが、それよりも汚い男女の乞食が、お椀を持つて根氣よくついて來るにはホトホト困り果てゝ了つた。

やがて案内されて、伽藍を次から次へと見物する。しかし番僧達は金を目當にして、寺の什器を盛に持出して賣つてゐる。三名程の案内僧が、何時の間にやら五六名になり、お互に秘密に賣らうとあせつてゐる等は、全く竊盜の一團としか思へない。而も此の仲間は二三千も居つた事があるそうだ。今は何名居るかわからないが、兵士に次いでの良くない階級の様に

思はれる。或は兵士は時々戰爭によつて落命して功德をするかも知れぬが、此の連中は反つて其樣な應報生活を味ふ機會が少いのだから、それだけ罪ふかい者かも知れない。早々と旅館に引上げる。

四日。公使館の紹介狀を得て、北京大學其他を見學に行つた。不幸にもロックヘラーの慈惠病院、及び同醫學校は會議中であつたので內部を見る事は出來なかつたが、外觀は實に見事な支那宮殿式の建物だ。青丹の瓦がキラキラと光り、獅子がやはり番をしてゐる。これが時々變な巢窟になるのかと思ふと、勿體ない樣に思はれる。又東洋の各地に此の樣な設備のみをしてゐる、ロックヘラー慈善財團も島國根性の者には思ひもつかぬ事であらう。

次いで北京大學を訪問する。此の大學は三つに別れて、法科文科理工科と云つた風になつてゐる。名は大學だが見かけた所、その敎室なり、その設備なりは、全くお話にならないと思つた。休暇中なので學生は多くをらないが、聞く處によると、此處の學生は學究よりも政治運動を主としてゐる者が多く、排日運動の煽動係の樣な立廻りをしてゐるらしい。それで政變のある每に學校の財政もぐらつき、今年等は九月に入つても授業は始るまいと見られてゐる。勿論校長は何處か遠方へ亡命中で、北京には居らないとの事だ、清國時代にはこうでもなかつたのだらうと思ふと、何とはなしに氣の毒な氣持にもなる。

更にその校舍についても氣の毒に思はれるのは、學校として造られたのは、第一院だけの樣に思はれる事だ。第二院は何とか親王の屋敷をそのまゝ使用してゐるのだそうで、宮殿に見うけるやうな朱門が入口である。第三院も屋敷か寺院のお舊の樣なものらしく、第二院第三院共に內庭がある

等はどう見ても學校らしくなかつた。第一院のみはペンキ塗の細長い建物で、一見學校だとうなづかれるが、今では主として書庫になつて居り、教室らしいものは不幸にも參觀する事が出來なかつた。支那服を着した大學生が五六名讀書に耽つてゐたのに懷しみもわいた。第二院だつたと思ふが、五百人とは入りかねる樣な唯一の大講堂や、親王家の後宮だつたと思はれる處に設けられた、貧弱な實驗室を見せられて、日本の大學の有難さが思はず口外させられてしまつた。

午食の後自由に市街を見學に出かけた。先づ近くの東安市場（トンアンシーチャン）へ行つたが、何から何までコマ〳〵と店をならべてゐる。呉服屋もある、貴金屬店も書店もある。その隣りでは秋蟲を籠に入れて賣つてゐる。胡弓や太鼓や玩具をならべてゐる者があるかと思ふと、銅貨を山積して兩替店の樣にも見える店もある。占者も居れば、香具師も居る。孫中山張作霖や、其他の軍人の寫眞が、美人繪と同列に頑張らせてゐる寫眞店もある。和合像や阿片の吸口等をならべてゐる道具屋もあれば、一膳飯店もある。しかも一樣に懸値で出來上つて居るやうで、買ひにくい事非常なものだ。先づ云ひ値の半分以下で何んでも買へるのだから、氣味の惡い事もお話にならない。

次いで前門街とかいふ賑やかな町へ行く。大阪の心齋橋筋によく似た所で道巾は實にせまく、その中を女も男もゾロゾロ歩いてゐるのだ。而して兩側の店頭には大旗がひるがへり、又金文字の看板が所せまい迄ならべてある。その裝飾の樣子は活動寫眞の旗と藥屋の看板を合せた樣なものだ。その三間位しかない道を、汽車（支那では自動車の事を汽車といふ。）も馬車も洋車も通るのだから實に煩はしい。とりわけよく目につく店は呉服屋である。レデーメードが多く吊られてある。又斷髪の美人が多いが、汚は

しい軍人の數は、蠅の數よりも多い樣に思はれる。

扨て何か土產をと思つたが、來てみると何も買ひたく無くなつてしまつた。買ひたくとも何一つ思ふ樣に買へない。第一言葉が通じないし、その上値切らねばならぬ樣に思はれるのだから、一寸の事では手出しが出來ない。人間の惡くなる事此の上もない樣に思はれた。

で出來るだけ多くをカメラに納める事にして撮りまくつた。が或る大道商人の老人に、レンズを向けて、眼に角たてられてしまつた。影をうつされると、壽命が縮まると考へてゐるらしい。明治の初めの老人と同じやうだ。

五日。北京に於て最も收穫の多かつた日である。否最も多忙に走り廻つた日と云つた方が適してゐるかも知れない。

奥地より駱駝を唯一の運輸機關として、毎日色々なものを北京へ持ち込むと聞いてゐる。又名產屋の店頭にも左樣な繪葉書が見受けられるが、一向に實物に接しない。勿論繪では駱駝によつて、旅行してゐる人の姿も知つてゐる。話では隊商の事も聞いてゐる。が實物の駱駝とては動物園以外では見た事もない。長城や十三陵の見學が不可能となつた以上は、此の北京へ來る駱駝を見るより外に道もないのだからとて、大奮發をして薄暗い內に起き出で、駱駝見物に行く事にした。所が不思議にも靴が見えない。宿中大さがしをやつたのだが、どうしてもわからぬ。扨ては名物の小偸市（シヤオトルイチ）の材料になつたかと思つたが、先をせくのでともかく他人の靴で、カメラマンと出かけた。一行はやつと起きてゐた平野、澤田、辻と又光通辭の五人連れである。

何處をどう走つたのかわからない。人通りは多くないが相當さわがしい

街々を通つた。やがて目指す城門へと着した。名も何も知らぬ。唯下車して駱駝の來るのを待つのだ。

かく云ふと如何にも氣長な樣だが、此の附近では朝には駱駝が來るものにきまつてゐるのだ。此處までの途中でゞも、既に二三の駱駝の隊に遇つた位だ。一人の男に導かれて十頭あまりの駱駝が、各々脊に何か物をつけて一綱につながれ、溫順しく次から次へとならんで來る姿は、のどかなものである。もし彼等駱駝追ひに生活問題の苦がないならば、確かに長壽をするにちがひない。豐富な詩趣もたくはへられるだらうと思はれる程、のんきに見えるものなのだ。又その荷物を下ろす場合も珍しい見物である。第一に男は駱駝の鼻綱をグイと曳くと、獸は鈍感らしく頭を左右に振つて嫌だといふ氣持を示すが、やがて第二曳によつて、苦もなく前左足の第一關接を折る。次には前右足の第一關接を折るのだ。恰も人間ならば手首を折つて手の甲で立つてゐるやうな按配で、人間には到底出來る藝當ではない。やがて第三曳によつて、更に第二關接より折つて前方へ曲るのだ。人間ならば肱の所の關接を曲げて、手首の關接と同樣の方向に折るのだが、我々にはそううまく同方向に曲げる樣には出來てをらぬから、一寸想像も難い位だ。兎も角最後に後足の方を曲げて、完全に腹匍ひの姿となるのだが、それでも脊のびしてやつと荷物を下ろさなければならない位だ。腹匍ひ中の駱駝は、脊の荷が下されやうが、又つまれやうが、一向平氣で眼を細くして口を動してゐるのみだ。鈍感なのか、徹底してゐるのか、考へやうにより何れともとれよう。やがて荷下ろしが濟むと辨髮の男――云ひもらしたが駱駝を曳いてゐる男に辨髮の男も多いが、辨髮でない男は短く削つてある。眼と頭と顏とが光るのが彼等の特徵だらう。――が鼻綱を右左に搖ぐと駱駝はやをら立ち上つた。而して相變らず口をモガモガさせなが

らキョトンとしてゐる。

丁度或る一軒家の前に一頭の駱駝君が腹ばつてゐた。長途の旅につかれたのであらう。口は動かしてゐるが眼やにを長くして、何か夢みてゐる樣子だ。近づいてカメラを構へて一枚撮つた。すると駱駝の飼主が突然現れ出て、しきりにやかましくいふ。仕方なしに歩き出すとどこまでもついて來る。

『己の駱駝を撮つたのだから金をくれ。』と云つてゐるのだそうな。撮つてゐたのを見てゐて後になつてから文句を云ふのだから始末が悪い。終に高い寫眞になつてしまつた。振り返り見れば駱駝はのんきに長い影を砂の上に投げながら、口を動しつゝ眠つてゐる。主人が自分の寢姿を撮られたので一儲けしたとは、夢にも思つてゐまい。

城壁の外は荒い石で鋪きつめてあるだけに歩き難い事甚だし。その上に五寸ばかりも土埃があるのだから實につらい。それでも自動車にゆられるよりもましなので歩いて見たが、漸く顏を出した太陽は鈍い光をなげてゐる。内地では見られぬ樣な、薄い柔い長い影を投げてゐる。山もない廣汎な平野のはずれより現れる爲めであらう。

日の丸の旗を車頭に飜しながら城門を通る。武裝した軍人が通行の支那人を一人々々點檢して通してゐる。二三日前より北京城内に戒嚴令がしかれたゝめなのだ。しかし我々の乘車には日の丸の標がある爲に手をつけない。外國人は全く自由に通れるらしい。戒嚴令の不徹底や、支那人の外人に對して不滿に思ふ點も此處にもあらう。

やがて通りすがりに大豆の朝市を見物して、小偷市も此の樣な物かと思ふ。路傍に露天で店をならべ、大勢がそれに集つてワイワイ騷いでゐるの

だ。皆同じ様な白つぽい裝をし、頭を光らせてゐて區別がつかない。これでは盜人も調子よい事だと思ふ。

小偷市とは變なものだが、支那には古くからあるものださうな。何でも夜中に稼ぎ集めたものを、未明迄に此の市で賣買するのだそうな。勿論粧品だから破格に安いのが名物だそうな。盜難にかゝれば警察に申出るよりも二三日此の市場を見廻ると賣出されてゐる事が時々あるとの事だ。而して自分の物だと決ると巡査をつれて行つて取り戻すのだと云ふ話。何とやつかいな所だが、又便利な所もある。しかもその盜人をあまり追求せぬのも我々には了解に苦しむ所だ。天下國家の乘取りゴッコをしてゐる人達も、一種の高等盜人なのだからこそ盜人もあまりとがめられないのかも知れない。かく考へると支那には刑務所と云ふ樣なものゝ必要も、警察の仕事もない樣であるが、二つ共あるらしい。しかも服役してゐる罪人を見たが、

彼等は如何にして囚人となつたのか、不思議に思つた位だ。要するに不運な者が服役するのだらう。

朝食にまだ間がありそうなので城壁散歩に出かけた。銃を物憂そうに擔つてゐるアメリカの歩哨が、所在なさそうに歩いて居る。

グット、モーニング。

と呼びかけると、強く、

、、、、モーニング。

と答へた。グッドなのかどうか知らぬが、グッと喉につまつた樣で聞き取れなかつた。彼は何か外の事を考へてゐるらしい。番してゐるといふよりか散歩してゐる位のものだらう。

旅館に歸るとやはり騷いでゐる。何でも隣室の客の靴もなく、合せて三足程紛失してゐるのださうな。宿では『お氣の毒です。どうやら昨夜忍込

んで取つたらしいので。』と云つてはゐるが、警察へ屆ける樣な事もないらしい。無駄だから屆けぬのだらう。毎度ある事と見えて騷いではゐるが、どこやら物馴れた騷ぎ方だ。

食後、天壇見學。その昔、不老不死の靈水の天降るのをうけたとか、又天壽を祈つたとか云ふ所だ。例によつて立派な建物だが、何處にも草が繁つて亡國の色濃かである。至る處の宮殿らしい處が、軍隊の宿舍となつてあるのも亂國氣分だ。靴なくスリッパで歩いたが、如何に歩きつらいものかをつくづく味はつた。

今日は黃道吉日ださうな。結婚とか葬式とかは多く今日の樣な『日柄もよい』日に取行はれるのだそうな。死んだからとて直に埋まず、吉日の來るのを待つて、葬式を出すと云ふ習慣がまだ殘つてゐるといふ話だ。午後よりは生憎の雨だつたが、それでも葬式の通つて行くのを旅窓より見られた。

不幸にして結婚行列には合なかつたが、(大連で一寸見たが、餘り大したものでなかつた。)葬式は餘程日本と變つてゐる樣に思はれる。勿論色々ある事と思ふが、私の見たのは變な日淸戰役や、元寇の繪卷に見る樣な、圓錐形の帽子を冠り、赤色をおびた陣羽織の樣なものを着てゐる。而して二列にならび、先頭に二人大きな鼓形した太鼓をかついで行くと、次の二人はバチのみを持つて續いて行く。次いで大きなラッパをかつぐ人の後には、そのラッパを吹く人が行く。この樣にして持つ人と、打つたり吹いたりする人が分業になつてゐるのだ。行列らしい服裝はしてゐるのだが、生憎の雨の中を裾はし折つて歩いて行く姿は、あまりに吉日らしくも思へない。

雨の中を靴を尋ねて廻つたり、又書店をさがしたりしてゐる中に、日は暮れた。夜は明日の奉天への直行のため早く寢る事にして外出は見合せた。

六日。愈々夜八時半の奉天行の急行で歸路に着く事になつてあるのだが日の内は自由行動を取る事にする。或は支那服に、或は骨董に思ひ思ひに足をのばしてゐるが、先達て見付けておいた活動寫眞の機械を求めに、公使館區域にある阿東照相館と云ふ獨逸人經營の店に行く。此の活動寫眞の機械を買ふに全く一苦勞させられたのだ。先日此の店で見た時も、先づ英語で失敗し、次いで獨逸語で話は通じたが、こつちが上手でないのでさつぱりらちがあかない。賣子の娘達はクスクス笑ふ。何とはなしにきまりの惡い思をさせられたのだ。日頃獨逸語ならと空威張りをしてゐたのだから少々變なものであつた。がしかし曲りなりにも、今日はその獨逸語を判じて取引するのである。勿論支那語を語る番頭の樣な男は居るが、通譯を通じての話しはやつぱり變なものだ。曲りなりにも、ブロークンの獨逸語で話して見たく、半分程は手をはたらかせながら、一言一言話すのだから並大抵の事ではない。やつとの事で、とらへた單語を判じて全意を通ずるのだから、面白いには違ひ無いが、手間の取れる事も大したものだ。が幾度かの折衝の後、試寫に出かける事になつて、一同ビール樽の樣な獨逸人の後に續いて城門を外に出た。

例の如きザワザワした支那の通りだ。彼が機械を動かし、一同が俳優然として歩くのだ。一列にならんで歩いて行く姿の無表情さは、まだ〳〵寫眞時代の顏付である。

やがて自分で動かしてみたがうまく動かぬ。彼獨逸人もやつたがやはり動かない。しきりに

『ノイエス、モデル……。』

というてゐたのだが、ノイエスの後の言葉が、どうしてもわからないの

で、新らしい場面の所で撮らうと云つてをるのだと思つたが、それでもなさそうだ。よく聞いて見ると『店にもう一つ新型の機械があるからそれでやつて見よう。』と云つてゐたらしい。成程ノイエスの次に來るモデルの意味も受取れた。がこれでは獨逸語をやつたとは云はれない、とつくづく悲觀したが、何もわからない支那語を聞いてゐるよりも、耳に懷しく響いて來るだけは確かだ。强制的につめ込み三ヶ年の獨逸語の智識なのだから、而もその内にあまり勉强もしなかつたのだから、これ位の所で無理もない事だと、やつと思ひを靜めて彼の店へ歸つた。

歸れば正に正午である。彼等の習慣として正午より二時迄は食事の時間として店を閉すのだそうな。獨逸人曰く、

『もう正午になつたから食事の時間だ。二時迄店を閉めるからそれ以後にしてくれ。』

との素氣ない挨拶だ。日本だと食事を延ばしても形をつけるのだが、毛唐は賣る事よりも食ふ事を大事と考へてゐるのに違ひない。我々も食事に與定されてある北京飯店へ向ふ。

飯店と云へば一膳飯屋の樣だが、どうして〳〵佛人の經營にかゝる北京第一のホテルなのだ。連日の不味い日本食に參つて今日は洋食を喰ふのだ。大連で洋食に閉口した連中だが、その樣な氣色をオクビにも見せず美味い〻〻と喰つた。實に調子よく出來てゐる人達である。

二時に再び例の店を訪れ、取引にかゝつたが、機械を完全に受取る迄には更に二時間も話さなければならなかつた。この樣に頭をはたらかし、肩の凝るやうな買物をしたのは初めてゞある。しかも少々は高い樣だが（勿論内地よりは安い。）その結果より見て、又苦心して購つたといふ點より見ては決して高いものではないと思つてゐる。よい思ひ出の種であるから。

何はともかく北京の景色を撮して土産にしなければならない。日沒にはまだ少々時間がある。高橋と二人自動車を驅つて、北京驛や正德門附近から城壁及公使館附近を撮しまわる。紫禁城内や萬壽山等を撮る事が出來ないのは如何にも殘念だが、少しでも北京の風物をもつてかへる事の出事るのは何よりだ。唯寫つてゐるのか、をらないのか、さつぱりわからないので心もとなかつたのだが、兎もかくもカタ〳〵と廻したのだ。今日より考へると幸にもうまくとれてあつたので此の樣なよろこびはない。慾を云へば、もつとくわしく撮つておけばと思ふ位だが、日は暮れかゝるし出發の時間はきまつてゐる。加ふるに苦力や車夫が珍しそうに集つてくる。あの時の事を考へると、あれだけを撮るにも大抵の事ではなかつたのだ。

第四篇　歸路

―北京よりぢばまで―

騒しい車中

上海までもと目論んでゐた旅程も、何やかやと咎がつき、北京郊外さへも思ふまゝに見物する事も出來ずに、やむなく愈々歸國の途についた。

數へると色々な原因事情もあらう。亂國の兵變による交通機關の危險不規則もその一つに數へられるが、又一方短時日の內に比較的廣い範圍を型の如くに旅した爲めに、期せずして一行の間に故鄕戀しの心をおこさせたのも其の一つであらう。がその最大の責任は敢行し得なかつた不決斷によるものと自責に堪へない。十數ケ月後の今日、時々刻々に進展する支那事變を耳にするにつけ愈々心殘りに思ふ次第である。

兎も角、先日下車した公使館區域の入口より乘車に及んだ。例によつて

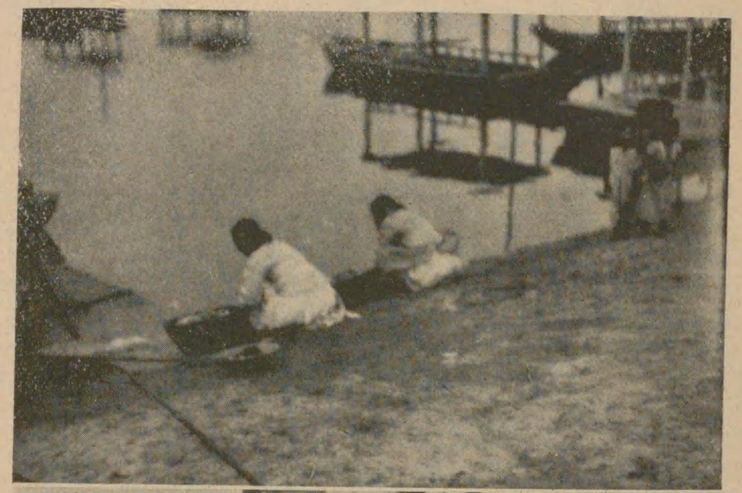
（上）山海關　異境に見る同胞（一七三頁）
（下）山海關　停車中に朝食取る民國兵（同上）

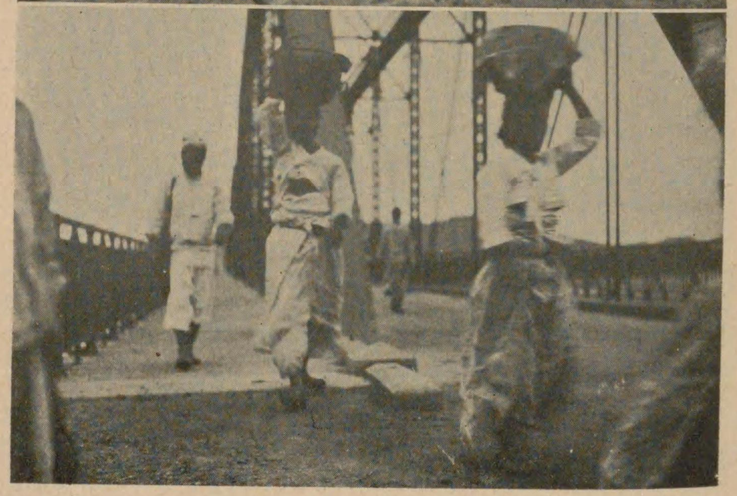
冬期氣分の濃厚な小窓を有する列車だ。しかも十七八輛も連結してゐるのだらう。後部より眺めると機關車の方が小さく見える。

狹い通路に山と積まれた荷物の整理もすんで、ホット一息する時、誰かゞ喜多さんの姿が見えないと云ふ。成程荷物に氣を取られてゐて氣付かずに居たが、深谷さんも土佐はんもどこにも居らない。荷物は如何に整つても、人員に不足があつては掉尾の大失態であるばかりでなく、出發するわけにもゆかない。と云うて言葉も充分通じない北京、あてになつてならない警察のある北京、戒嚴令中の北京を、何處をどうさがしてよいのやら、さつぱり見當もつかない。一同は唯さわぐばかりで一向に自信もない。

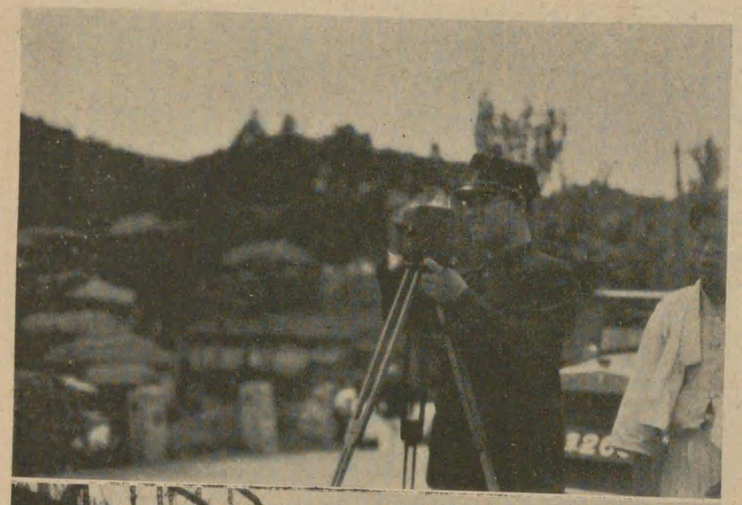
『今に出てくるだらう。』

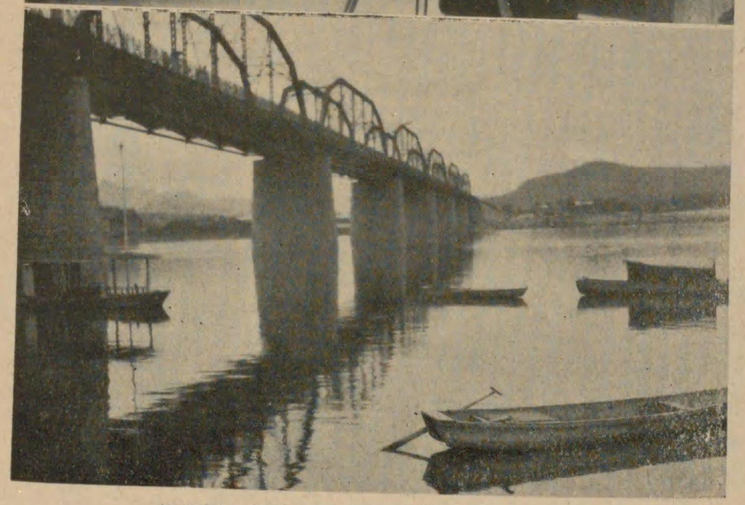
と云つては見たが心細い。支那語のはなせる二人にあちこちプラットホームをさがしてもらふ事にはしたが、發車の時間は迫る、支那人は增加する、





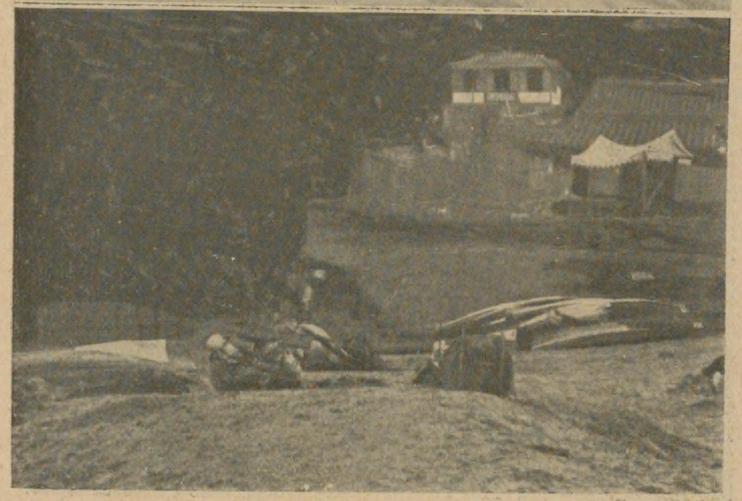
京城　鮮人風俗





（上）北京にて苦心の結果手に入れし撮映機

（下）京城　漢江鐵橋



（上）京城　南大門
（下）京城　土運ぶ勞役夫

不安はまさる、あまり感心出來ぬ狀態だ。

やがての事に夏目氏と來る三人、各人各樣口角泡をとばしての苦心談を綜合すれば、旅館を出て、運轉手が何か話しかけたのだが、意味が通ぜぬので只うなづいてゐたそうな。すると北京驛へは着いたが一行が見えない。且つ言葉が通ぜぬので改札は通してはくれぬ。巡査や、兵隊がおこりちらす。廣い驛をうろ〳〵してゐる時、幸にも支那語を話せる日本人に遭ひ、やつとの事で出て來たとの事だ。最後に又も異國膝栗毛の一頁をかざつてしまつたのだ。青筋立てたり、眼を怒らせたりし乍ら、ウロ〳〵してゐる姿はあまり感心出來なかつたとの話だが、御本人達は尙笑へない樣子だ。餘程心細かつたにちがひない。

巾廣いプラットフォームには數へきれぬ程の軍人が居る。しかも街上で見る樣な姿ではなく汚はしい服裝ではあるが武裝してゐる。見れば我々の

乘車の向ふ側には長い貨物列車樣のものが着いてゐる。而もフォードやクライスラー等の乘用自動車やトラックが五六臺も積まれてある。聞けば山東方面に出征する人々だとの事だが內地で見る樣な勇しい出征振りではなく、死出の旅へと錦を飾つてゐるのでもない。例によつて一式灰色の武裝に銃をたづさへてゐるのみだ。しかも去る奉直戰の如き急を要する時には、無蓋貨車に二重にも三重にも積み込まれて戰線へ送られたのだと聞いては議論の沙汰ではない。生き乍ら戰場に着くものが幸福なのか、命からがら逃げ出す奴が最上の果報者なのか、考へれば考へる程わからなくなる。しかも彼等は僅かな給料の不渡のために縛られて出征して行くらしい。大きな鍋もかつぎ込んでゐる樣は、丁度震災の時の應援列車か避難民列車だ。

ふと見れば、プラットフォームの中央を疾驅して來る一臺の自動車がある。軍人に依つて守られてゐる處を見ると高官らしい。やがて我々の列車の側に着けば、一人の老華人が下りて客車へと乘込んだ。後はザワザワさわいでゐる。萬事がお伽噺の樣に思はれるが、支那にては今や軍人の力が強く、聯隊長級以上のものは、平氣でプラットフォームに自動車を乘入れる習慣だそうな。勿論要路の大官でも同樣だ。かくて彼等は列車を我が物と心得てゐるのである。勿論賃金を拂つてゐるのか拂はないのかは論外であらう。

支那の列車の不規則な事は屢々聞いてゐたが、發車するにきまつてゐるものは、規定通り發車するのだと思つてゐた。處が二十分經つても三十分經つても發車する氣配もない。軍人はドヤドヤと歩行し遠慮もなく我々の室をのぞき込んで行く。加ふるに發車間際の列車でも、命令一下で出發できないと聞かされては愈々不安である。試みに車掌と覺しき男に尋ねて見たが、何時發車出來るか不明だとて凉しい顏をしてゐる。此の位の事は毎

度の事ですよと云はんばかりの面構へだ。『鄉に入れば鄉に從ふ。』より外ないと不氣味乍らこらへてゐると、小一時間も遲れてやつとの事で發車した。

列車が動き出すと、今迄我々の箱の前に整列してゐた一個小隊程の比較的整つた軍人が、三人の軍樂隊（？）のラッパと太鼓に合して捧銃の禮を取つた。何んでも先の自動車の軍人を送つてゐるらしいが、恰も我々を見送つてゐるとしか思へない。軍人達は固くなつて睨みつけてゐる。異樣な音樂は何の會釋もなしに耳をつく。全く思ひもよらぬ事ではあつたが、珍しい御馳走にあづかつて、時間のおくれた事を帳消しに、幸先よしと思ふばかりだ。軍人の後方には見送りに來てくれた信者の方も數人居られる。心では何とか合圖したく思うたが、窓には網がはられて手を出す事も出來ず。さりとて萬歳と呼びかけてよいのやら惡いのやら。事情のわからぬ土地では實に窮屈である。

列車は動き出したのでやれやれと思つた。定めし軍人も餘分な奴達は降りた事だらうと思つたからだ。和服に着換へて外に出た所が大違ひ。デッキと云はず、通路と云はず相變らず軍人ばかりだ。而も我々の部屋の前にて高聲の會話、宛然護送されてゐる樣だ。此の調子で天津まで行かなければならないのだ。高官のお蔭で軍隊の見送りを受けたのは好いが、此の護送には少からず閉口させられる。向側の部屋には高某太人といふ夫人が居るが、案外のんきに西瓜の種子を嚙つてゐるのが癪にさはつてならない。

やがて天津にて連日通譯の勞を取つて下さつた夏日愛氏にお別れし、軍人達も下車したので比較的靜かになつた。枕についたが、せはしく暮した北京の生活が後から後へと幻のやうに現れて來て、一寸寢つきにくい夜である。

山海關

不安な夢ではあつたが何時の間にか、ウトウトしてゐた。ふとさめて見ると相變らず平原の中を走つてゐる。高粱は少し色づいては居るが何の變つた風情も添へない。唯遠方に雲か霞の樣に山らしい影が見えるのが、山國育ちの者に取つて何となしに嬉しい。

やがて秦皇島に入つた。驛頭にひらめく日の丸の旗。我が國の軍隊が駐屯してゐる處なのだ。不安な車中より此のひらめきを見た時には、國家の有難さが一入身に浸込む樣だ。元氣よい武人が二人、列車を睨んでゐるのも嬉しい。

無線電信のポールを右に見て我々は滿洲へ滿洲へと急ぐ。間もなく中原と滿洲との關所である山海關に着いた。昔ならば符契の節でもなければ出

ゐる事も入る事も出來ない所なのだらう。所謂萬里の長城の一端は此の地に終つてゐるので、連山の峰づたひに僅かに殘つてゐる面影がうかゞはれるが、今は旅人の眼を止める事もあまりあるまいと思はれる程の無用の長物である。

時間表を見ると何でも四十分も停車する事になつてあるし、加ふるに驛と驛との距離の長い支那の事だから、乘客は我先にと下車して或は散歩し、或は食事を取り、放溺してゐるものさへある。朝食時刻なのだから分けても食事を取る人が多い。甘酒樣の物やソバ等をしきりに喰つてゐる。鷄の丸燒等も賣つてゐる者もある。帽子をアミダに着した汚はしい軍人達が、茶椀片手に食事を取つてゐる姿は見られたものではない。

列車が着すると、警備の日本兵が四五名もやつて來た。而して我々を見ると、懷しそうに擧手の禮をしてにこやかに近寄つて來る。異境に同胞を

見る喜びだらうが、昨夜以來狹い車室に押込められて不安な思ひを抱いてゐた者に取つては、彼等以上の懷しさを覺えると共に、此の邊地迄も國の爲にやつて來てゐる軍人に對して、何とも云へぬ感謝の念が湧いて來た。

一人は話しだした。

『私達は高知縣の者ですが、やうやく一年餘のお勤めも終り、近日中に內地へ歸るのです。』

一ヶ月位の旅でさへ、餘程內地戀しと思つてゐるのである。而して次から次へと旅を續けて氣の紛れる機會が多かつたに拘らず、その樣な仕末なのだ。而も同じ此の片田舍に同胞の保護といふ重大な任務を持つて、一ヶ年餘も住んでゐた彼等が、今や任務を果して故鄕へ歸る日を只管待つてゐるのである。彼等心中の喜びは察するに餘りあるものだ。

火車（華人は汽車の事を火事と呼ぶ。）は再び奉天へ向つて走り出した。今一度振り返れば長城らしいものがぼんやりと夢のやうにけむつて見える。小さい驢馬に跨つた男が三四人ぬかるみの中を無暗と走つて行く。

二重生活（奉天）

北京出發以來約二十四時間の不安な汽車旅行も奉天驛に着すると共にホッと一息入れた。何故に他國人の中に混つて不安であつたのか、考へてみればわからないが、身體の疲勞にも增して精神をつからしたのには、我乍らあきれて了ふ。が顧れば思ひ出多い旅であつた。朝食と晝食とを北京より持込んだパンに砂糖とソーセーヂとで詰込んだ腹は、何となく日本食を求めてゐる。更に夕暮近くなつて雨におそはれたのと、一日中小さな部屋でジッとしてゐて、將棋をやつたり形ばかりの讀書をしたりしたので、氣分の重い事も加はつて、管理所へと辿りついた時、云ひ知れぬ落着と嬉しさが湧いて出たのは、一同の期せずしてもらした笑聲にても知られる。

再び着いた驛頭は初印象の樣な殺風景な氣持よりも、整頓された爽々しさを感ぜしめた。これは或は馴れた爲でもあらうが、其れ以上に亂國の都より歸つた爲に外ならないと思ふ。過日大連での兒玉長官のお話がヒシヒシと思ひ當る。

『滿洲は二重式の土地だ。』

『日本人は殖民的才能にとぼしくない民族である。』

奉天は整頓した都會だと懷しみを以つて奉天に入る。

一夜明くれば又新しい元氣が出て來た。午後の汽車迄に内城を撮影に出かける。

吉順絲房や奉天公園等を撮して歸る。道行く人の服裝も袷になつた樣だ蠅の煩はしさも少くなつてゐる。段々と寒さに向ふのだらう。人々の顏にもヤレヤレ今年の暑さもお名殘だと、云つてゐるやうに思はれる。洋車夫

のシャツも以前程の臭氣を發散させない。見るもの聞くもの皆二十日以前の印象よりは平和に、且つなつかしくなつてゐる。唯軍人のみが依然としてあまり感心は出來ぬが、山東出兵等で多少活氣付いてゐる樣にも思はれるのと、奉天票が以前よりいくらか盛返してゐるのが、少々嬉しくはない。

やがて當分の名殘りを止めて奉天を後にした。例の鐘を聞き乍ら多數の見送りを受けて發車した時には、何となく感傷的な喜がわいて來た。家へ歸れるといふ樣な氣持も手傳つてゐたのだらうが、それ以上に土地に對する懷しみである。

嘗ては『淋しいぞ！淋しいぞ！』と云つて居るやうに思はれた故鄕戀しの鐘も、今は反つて『新地を開け！滿洲は住良い！』と云つてゐる樣に思はれる。しかも京奉線で聞いた樣な銃聲は起りそうにもない。凡てが來た時とは違つて親しみのある土地とはなつてゐるのだ。

『カラン、コロン、〳〵〳〵。』

と汽車は元來た道へと引返してゐる。廿日餘りの間、關東州以外では、殆ど見られなかつた山が、近くなつて來る。隧道がある。何を見ても懷しい。やがて安東を越え鴨綠江を渡れば朝鮮なのだ。一同の談話も力が入つて來た樣に思はれるのは、上海を見殘した憾よりも內地へ近づいた喜びの方が大きい爲であらう。

安東の稅關も事なく通過して、再び鴨綠江を夜渡つて朝鮮へ入る。白衣長管の漫步も奧ゆかしい。思ひ出深い平壤も夢の內にすぎ、夜明けと共に京城に着いた。

一視同仁（京城）

夜明けと共に展開された木のない山や、堤の見當らぬ川も懐しい。ギアー、ギアーとアカシヤの葉影より飛立つ烏さへ迎へるよろこびの辭と思はれる程だ。

京城南大門に着けば、奉天以上に内地臭の濃厚な土地だ。しかも奉天以上に整頓されてあるのが如何にも心强くたのもしい。管理所に參拜すれば奉天で得たと同じく親の懐にいだかれてゐる樣な心地になる。

午後よりは風俗を撮りたくて陸軍町から漢口の畔に出た。背に土を乘せて運ぶ勞働者や、長管を口にし乍ら牛追ふ男等は、日に十噸からの仕事をする苦力に比べて如何にも悠長なものだ。頭で物を運ぶ女、或は洗濯に精心する娘等を見れば、支那よりは活動的な女の樣だが、見えただけで其れ以上の腹ある樣に思へぬ所が特徴と云へば云へよう。流石に路傍に寢てゐる人や甜瓜の食事を取つてゐる娘達もあまり見受けぬのは、朝鮮にも秋が來てゐる事を示してゐるのだらう。

宗教課の案内で鮮人の左の學校を段々見せてもらつた。往路には休暇であつたのだが、今此の目的を達し得たのは幾らか參考になつた所だ。

見學の順序を示すと次の樣だ。

1 京城女子公立普通學校
2 淑明女子高等普通學校
3 壽松公立普通學校
4 京城第一高等普通學校
5 京城醫學專門學校

4、5の學校は殆ど內地のそれと變る事がない。唯內地の醫專が大學に昇格した爲、內地から盛に招聘があるとの話であつたが、面白い現象だと思つた。

最も注意を曳いたのは小さい兒童の巧な內地語の話振りである。內地の小學校に相當する普通學校で、第二學期となれば完全に內地語を使用する事が出來ると云ふ話だ。

七八歳ばかりの可愛い子供が、

『センセイ、ソレハ違ヒマス。トンボデアリマス』

と明瞭な、且つ完全な內地語で話すのには全く語學の天才だと感心してしまつた。此の分ならば同化の實も近き將來に實現され得ると思ふ位だ。

朝鮮には義務教育といふものがない。而も此の樣に學校教育の盛になつたのは近年の事である。舊王朝時代には官吏養成のために、『京城に成均館及東西南中の四學、各郡に鄕校といふものがあつて儒學を宗とし、科學に及第して官吏に登用せらるゝを以て唯一の目的』としてゐたのだが、その內容としては見るべきものがなかつたらしい。外に書堂と云ふ昔時の寺小屋風の國民教育機關があつて、童蒙に漢文の素讀を教へてゐたのだが、勿論完全とは云はれぬものだ。先づ時代と共に教育思想を注入したのはキリスト教の傳道師や、日本政府の力に依つて初められたのだ。それも、漸く學校令として統一あるものとなつたのは、明治四十一年以後だが、日本流の國民教育として內地と同一の方法で實行するに至つたのは極く最近の事なのだ。

外國人の手による學校は彼等の信仰より、又は他の目的より總督府の求むる樣な教授をしない。所謂不完全なる學校なのだ。それが現齋藤總督の

手に依つて內地と同樣なる劃一教育を施し、內地と同程度の學校とするに至つたのであるから、其教育の進步大いに見るべきものあると共に、當事者の教育設備に力をいたせる事の大なるを見なければならないと云はれてゐる。

總督府發行の『朝鮮教育要覽』の辟頭に、

『朝鮮に於ける教育の本旨は一視同仁の聖旨に基き教育に關する勅語の趣旨を遵奉して忠良なる國民を養成し以て社會文化の進展を圖り國運の興隆に資すると共に國民の生活の安定と其の福利の增進とを圖るに在るを以て內地に於ける教育の本旨と毫末も差違ある事なし』

とある樣に、此の一視同仁の精神で總督初め各教育者が獻身的態度と熱とを以て事に當つて居るのである。

しかし時代の趨勢と共に悲喜交々の結果をもたらしてゐる。

卽ち舊王朝時代には女子教育といふものには殆ど手がつけられず、唯特殊な希望者のみが、基督教傳道師の手に依つてなつてゐる學校で、不完全ながらも教育をうけたのである。が今日では男子は勿論女子に至るまで向學の機運が切に動いてゐるのは、時代の力であると共に、切に總督府の教導よろしきを得た爲だらう。が悲しい事には未だ普遍的に義務教育を施すまでには、設備なり財產なりが許さぬ爲、普通學校でさへ希望者の全部を收容出來ずして、やむなく頭腦と家の財產等を顧慮した試驗の上で入學を許してゐるとの事だ。現に壽松普通學校や其他で十歲より十三四歲位までの一年生を見た。此の年齡が一致してをらぬと云ふ事は、身體の發育狀態の不定な者に、一律の教育を授けるのであるから、必ず面白くない所が出來て來るだらう。十二三歲の者が六歲位の子供と一處に、

『お手てつないで皆歸ろ
　　烏も一處に歸りましよ。』

と遊戯をやつてゐる所はどうもいたいけない感がした。

次に言語である。子供達は達者に内地語を話す樣になつても、家庭では朝鮮語である爲、どうしても思ふ樣に同仁の實を擧げられないとの事である。教室では朝鮮語が禁止されてあるので、何不自由なく内地語で會話してゐるが、一歩屋外へ開放されると、彼等はやはり朝鮮語で戯れ遊んでゐるのである。誰か云つたやうに『言語といふものはその民族の顏の相が變るまでは決して滅びない。朝鮮語の生命もまだ〳〵長い』ことだらう。

第三に先生が一視同仁で教授してゐる乍ら一番に困るのは秀吉の朝鮮征伐の話だそうな。成程日本史で見れば一から十迄朝鮮に不利な樣であるが、決してそうでない。或地方には小西行長の潰走した名勝が依然として殘つ

てゐるそうな。實際潰走したのだから、一向構はないはずなのに、併合して後に、變な所に『國の名譽に拘る』と、力み出し、それを取壞さんとした處、鮮人の反對にあつて、終にそのまゝになつてゐるそうである。尤もな事だと思ふ。

『どうも事實は事實ですからあり態に歴史を敎へますが、それにも增して困らせられるのは「先生何日になれば朝鮮は獨立するのですか」と質問される事です。』

とは壽松普通學校長の話である。一視同仁の先生達の苦勞も、並大抵の事ではない。

淑明女子高等普通學校とは朝鮮に於ける最も古い女子教育機關である。私立ではあるが色々の人物を出してゐる歴史ある學校である。奉天で參觀

した女學校とはかはつてさつぱりした整つた學校の樣に思はれた。今は勿論五年制の女學校だが、舊制の生徒も少しはゐる。卽ち、今は丁度かはり目だそうで、女學校でも本科三年に豫科二年といふ制度が少しくのこつてゐる。豫科とは內地の小學校五年六年といふ程度なのだ。此の豫科は普通學校と女子高等普通學校と何れにもあつた樣に記憶してゐるが、何れ統一される事だらう。

勿論大學迄出來た朝鮮であるから、一通りの實業學校も出來てある。しかし何れにせよ創立以來年限が淺いので內地程迄に敎育が普及するには、まだ〳〵時日があるやうだ。しかし支那の現狀を見、又過去の朝鮮の狀態を聞いて、現狀と比較する時、隔世の感あるは勿論である。京城大學其他の專門學校では、內地人よりも鮮人の方が好成績を示すと云ふ事である等を見ても、今や建設期をすぎて發達期に入らんとする朝鮮の敎育界は多幸であると共に、一方大いに注意を要する時代だらうと思ふ。敎育の普及と共に思想內容は開發される。物質文明が增される。朝鮮の思想界はますます多事となるだらう。

朗かな讀書の聲を耳の奧に響かせながら學校見學を終り、廣壯な京城を一目にして俯瞰する事の出來る朝鮮神宮に參拜する。當神宮は、朝鮮には珍しい森林の南山を切り開いて造營されたもので、東洋風の舊宮殿を尻目にして朝鮮全土の物產を集め、巨萬の資と長期の日數とを費して、大正十五年漸く落成した歐風白堊の總督府廳と共に、寺內前總督の計畫になつたものだと聞く。同じ軍人にも色々な人があるものだが、何れも時を得たものだと云へよう。若し寺內總督にして今日此の計畫を遂行すれば必ずや以

前以上の反對を受け、或は貫徹し得なかつたかも知れない。何にしても寺内齋藤兩總督の性質を表して居るものではなからうか。

やがて夜の汽車でゴールに突進すべく、最後のコースに入る。夜なので何も見えないが、これが最初に暑さの爲にあてられたコースかと思ふと、不思議な位凉しい。勿論奉天以來漸次に暑くはなつてはゐるが、一向、苦痛はない。

お名殘の小雨に迎へられて釜山に着。大勢の見送りを受けて出帆したが、その乘船は渡鮮の時と同じ德壽丸であるのはこれ又懷しみがある。海上の雨を案じる人もあつたが、事なく凉味を充分に味つて、下關に上陸したのは夕方であつた。

内地の氣分は又一層整つてゐる樣である。見方によると實に窮屈に出來てゐる。加ふるに狹軌の列車は動搖が激しい上に暑さの激しい事此上もない。内地に歸つて又暑さのために眠れない夜を味つた樣な次第だ。

かくて明くれば九月十二日。田毎に稻穗が凉しくうちまねく内に、おぢばへと着いた。

顧みれば八月十日出發してより三十四日の長旅となつてゐる。しかも其都度の思ひ出は皆苦しい思ひ出ではなくて懷しいものである。午食の時、疲れと汚れとで膏切つた顏に鞭達し乍らうたつた『關釜聯絡』の一鎖は、心では凱歌としてさけばれたものに違ひない。

第五篇　支那回想

顧れば支那は實に不思議な民族によつて造られてゐる國である。勿論旬日たらずの短時日の見學であるから、適確とは云ひ得ないが、其間に目にふれた社會相の斷片を繼ぎ合す時には、何者かを取出す事か出來ると思ふのである。敢へて本篇を草する事にした。

支那は不思議な國である。得體の知れぬ民族である。

此の一言を以て支那を概評し得るものと思ふ。

先づその五千年の歴史を見ても明かな事である。三皇五帝の事蹟を問はなくとも、ジンギスカン其他の傑人が此の黄土に養はれ、歐州大陸迄も席巻したではないか。今や世界に覇をとなへるゲルマン族、アングロ・サクソン族等の民族にて、此の東洋人の治下に屈しなかつたもの果して幾らあらうか。たとへ短い年限であつたにしろ、たしかにローマ帝國以上の大版

圖を有し、アレキサンダ大王以上の歴史を有するのである。

此の侵略的な帝國主義方面を除いて、所謂文化的方面を見ても、これ又今日の歐米文化に劣らない歴史を有してゐるのである。試みに物質文化を考へて見るに、十八九世紀の文化を來す大動因となつた、火藥、羅針盤、活字、製紙等の發明は、歐州で發明されたるよりもずつと以前に、支那で發明されてゐた事は明かな事である。

十五世紀に於ける劃世的の事業であるコロンブスのアメリカ發見、及びバスコ・ダ・ガマの印度航路の發見の如きは、何れも蒙古大汗に依つて紹介された支那文化を求めて、恰も、甘き密を求めて匍ひ廻る蟻の様に、空想に近い目的を遂行せしめた結果である。即ち麗しい支那文化をたやすく手に入れんとした經濟上の目的からして、此の破天荒の事業がなしとげられたのである事は衆知の事實である。

更に眼を思想界に轉ぜんか。やはり歐洲思想に先だちたるものを見るのである。即ち仁義を説いた孔子の儒教思想は、今日の帝國主義道德思潮と殆ど變らないものではないか。又老子の『虛無』も亦今日の新しい思想として危險視されるものと、何のかはる所があらう。曰くマルキシズム、曰くアナルキズム等と呼ばれると、新しい様に思はれるが、かゝる思想は全然は同形でないにしても、少くともその主要點に於て等しい思想を、舊文化の標本の様に思はれてゐる支那の歴史は有してゐるのである。

かく考へれば彼等自ら稱する如く中華の民と云ふも、決して僭稱でないと思ふのである。

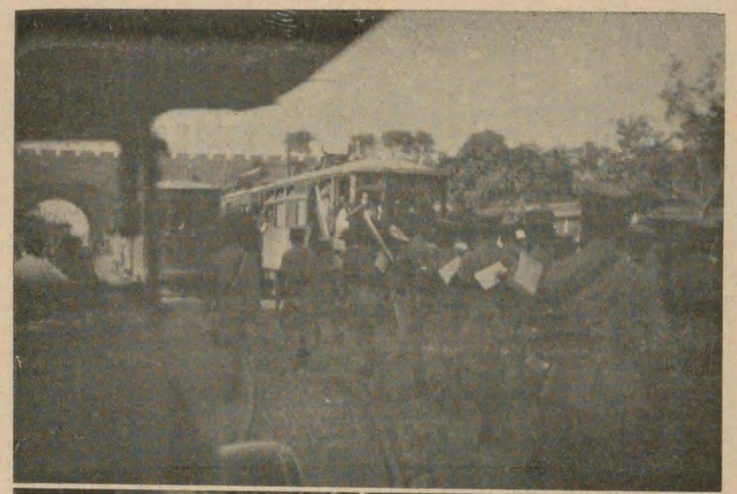
併し今日支那に足を踏み入れる者は、果して中華の民を見出す事が出來るであらうか。若し支那五千年の歴史に通ずるものならば、これがあの中華の民の血を受けた末裔かと疑ひ、已が眼を信ずるものは、中華の歴史は

唯徒に誇張された『唐人の寢言』に外ならぬと、敢へて專斷するであらう。

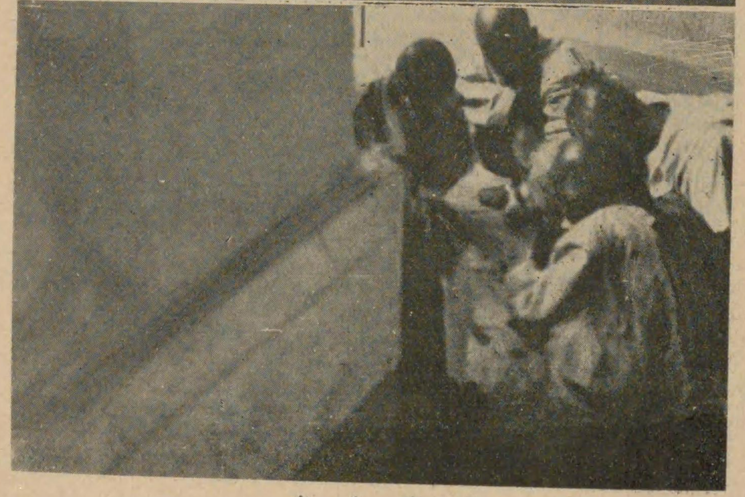
實に旅行者を刺戟する第一印象は汚はしい無數の浮浪人と、鼻をそむけしむる惡臭とである。これ我々にあたへる歴史的不思議とでも云ひうるものではなからうか。

不思議は獨り歴史に存するのみではない。更に社會組織の上にも不思議がある。恐らく此の社會的不思議の解決によつて、萬事の不思議な謎が解かれるのではないかと思はれる。換言せば、內政と外交、軍閥と政治、財政と經濟、階級と家族、或は都と地方等あらゆる社會相に於て、矛盾だらけでありながら、尙生命を持續してゐる所に不思議があるのである。私は奉天、北京及天津を素通りしたのみで、少しも奥地にも入らなかつたし、又中原の大部分、殊に北京とは人情風俗利害等を全く異にしてゐると云は

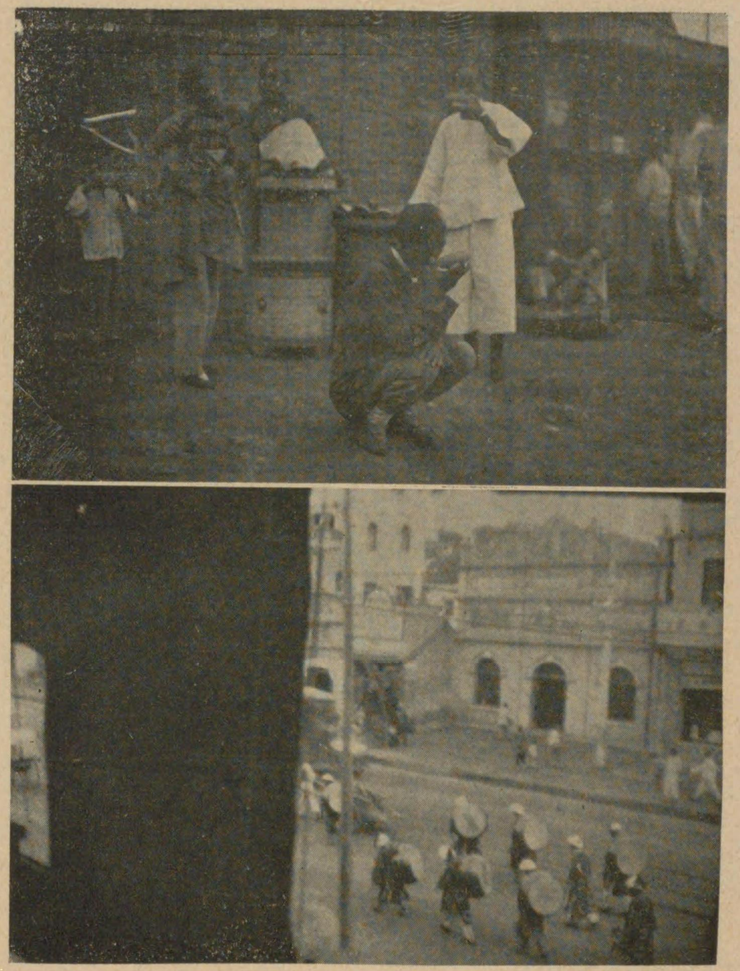
附きまとふ支那乞食（二一三頁）



(上)出征する軍樂隊
(下)徴兵宮(二二二頁)



(上)賣卜者
(下)車夫の賭博



（上）街頭にあたゝかいものをすゝる人々（二二七頁）

（下）黄道吉日（二二九頁）

れてゐる南方支那には、少しもふれて居ないのであるから、斷言する資格はなからうが、北部主要都會の樣を見、又地方の話を聞き、書物によつて想像すれば、我々の想像も萬更空想とのみ了らないだらうと思ふ次第である。

北京に入つて得た印象は、

『これが一國の首府なのか。』

『成程中華の國の首府である。』

と云ふ矛盾したものである。卽ち萬事が灰色の一語を以て形容出來る一般人の陋屋と、青瓦朱柱の豪壯な舊宮殿とが混つてゐる。舊宮殿はあれるにまかしてはあるが、一度歩を入れる時には、誰しもよくこんな事が出來たものだとの驚きと共に、王者風の一種の爽かな氣持にもなる。數多き樓閣宮殿及びその內に保存され、或は裝飾されてある幾多の書畫彫刻、又は翡

翠象牙貝類等の巧妙な浮彫等を見る時には、中華の文化に陶醉すると共に、王者の奢りを考へざるを得ないが、一度街上の浮浪人と民屋とに眼をむければ、驚く外ないのである。

庶民と王者、陋屋と王宮、これが中華の文化の意味と、同時に中華の民をして今日の支那人とならしめた、理由を示してゐるのではあるまいか。

同じ様に生活してゐる人々で、『天命』を感じて革命に成功した者は、その一族迄も榮進するのは家族中心の支那では普通の事である。而かもその一族と云ふものは、大家族制をとる彼等の社會では、日本人でさへ想像し難い程の大人數だそうである。而も一度王者になれば必ず王宮を建設し、又一族の住宅をつくるのが彼等の習慣だとも云はれてゐる。此處に於て庶民の膏血をしぼり取り、長い時間と多くの人數とを使役して、繪に見る様な美麗な宮殿を造り、お伽噺の様な生活をしたのであらう。併し此の幸福なる泰平な御代（？）の餘澤は、一般庶民にまで及ぶものではなくて、餘澤は單に其一族及官僚等極めて小數の貴族階級に止つてゐて、他はみぢめな生活に殘されるのである。かくて貴族達は餘澤を以て豪奢な生活をし、垣を高く廻らして一家を守るに反して、庶民は段々おちぶれて行つたのであらう。漸次國全體を考へる人はなく利己的精神にとらはれ、己が長所を延しながら今日の様な社會狀態を示す様になつたのであらう。

此の宮殿と陋屋との北京には、違つた方面でゝはあるが、貴族と浮浪民と云ふ二種の保守的な人達がゐる外に、所謂、新しい外來思想によつて啓發された新人も居るのである。門戸開放された今日であり乍ら、尙高い垣を廻らして祖先傳來の家風に從つて生活してゐる人々が貴族的保守主義者

であると共に、唯食ふための手段として、傳へられた仕事以外には何も精神的な働きもせず、人格を無視されながら平氣で働く無學文盲な賤民も、亦保守主義者であらう。此の兩者の內にあつて舊來の陋習を打破して、新支那を建てんとしてゐる、有識な新人を以て自任してゐる人達も相當に見受けられる。或は多分、外面のみの人も多からうが、斷髮、長髮の新人らしい青年男女を無數にも見るに及んでは、支那は老大國か新大國かと疑はしくなる位だ。日本よりは自由に、新時代の空氣を呼吸してゐる國のやうにも思はれる。見方によつては老大國なのか、新人の國なのかわからないのも不思議の一相だ。

今支那の社會的階級を一瞥するに、大體次の如く別けられるのだらう。

一、貴族的階級

(イ)官　僚（智力によるもの）
(ロ)鄉　紳（財力によるもの）
(ハ)煽動者（不平を有するもの）
(ニ)軍　閥（武力によるもの）

二、中堅階級

(イ)商　人
(ロ)工　業　者
(ハ)農　民

三、無產階級

(イ)苦　力
(ロ)兵　士
(ハ)土　匪

(ニ)浮浪人
(ホ)乞食

(一)階級は支配階級とも讀書階級とも稱せられるもので、有產有識階級なのである。王者を中心としてその看板の下に、私腹を肥やし勝手な生活をなし得る官僚が、此の階級の中心をなすもので、官權を笠にきて人民より膏血を搾取する機關に外ならない。彼等は徒に己が智を惡用して、社會を瞞着してゐるものである。

(イ)官僚には親分乾分の關係で多くの族人が居る。且つ財閥との密接な關係があるために、萬が一にも、政變や兵變によつて財政に關係する樣な事があるにしても、損をするのは一般人ばかりで、彼等はそれにより利益をしめるのである。卽ち官僚とその一族とは、利益關係により結ばれた一團體と見らるべきである。

(ロ)かくて官を辭し野に下り、着服に及んだ官費を以て勢力を植ゑつけた有閑階級が鄕紳で、其子孫は代々世家と稱して一般人民と風俗を異にし、讀書を事として官吏となるを志すのである。

(ハ)官僚を在朝黨と見れば、煽動者とは在野黨の如きものであらう。官を志して思ふにまかせずば、彼等は喫飯の一方法として、又初志を貫徹せしめる爲、土匪或は秘密結社と結託して仕事をなすのである。近時は學生或は勞働者を操つて、排日排英其他色々な社會問題、政治問題をおこさせてゐるのも、彼等の仕事と見て可からう。

(ニ)昨今に起つたものではないが、民國になつて以來特に著しくなつたのは、武力を利用して私腹を肥やさんとしてゐる軍閥である。彼等は單に腕力によつて利益にあづからんとする團體であるから、一度覇をとなへると、表面的の共和制は破れて專制獨裁的な政治をやるのである。袁世凱、張作

霖等は其好例であらう。或は官僚出身者を立てゝ大總統とするも、督軍等の軍人はみだりに私兵を增し私腹を肥やして、中央政府に從はず、終に大總統をも壓伏して了ふのである。黎元洪、段祺瑞等はその例と見てよかろう。かくて今や支那の天下は全く軍閥によつて我が物顏に處理され、統一を缺いて不安を世界一般に流してゐるものである。

約言すれば支那と云ふ國は、軍閥と官僚との私腹を肥やすために行はれる政變兵變によつて亂され來つたもので、支那の時代史とは彼等の間に行はれた革命史、又は政權爭奪史と見て差支ないものだらう。中堅階級は全く無視され、無產階級は彼等のために道具として利用されてゐたのである。

（二）中堅階級を見るに、これ全く經濟階級とも稱すべきもので健實に產業に從事してゐる階級なのだ。云はゞ貴族階級も彼等によつて支持され、無產階級も彼等のお蔭で生きてゐるのだ。而も貴族階級及び無產階級は常に權力又は暴力を以て、此の經濟階級を苦しめぬいてゐるのである。

（イ）門戸が開放されて第一に利を得、地位を向上したのは商人だらう。今迄最下部にいやしめられては居つたのだが、段々と實力の世の中となり、金の世の中になるにつけて、武人よりも商人に社會の實力が移つた事は德川時代と好一對である。しかし支那はまだまだ軍閥の國であり、官僚の國である以上、此等二者により搾取される被害も最も大きいものである。且つ煽動者の魔手が、外貨排斥となるに於ては、彼等商人は心ならずも一時は曳きずられるのではあるが、此の運動の破れるのも、亦必ず彼等商人より萌すものである。

北京滯在中、軍閥の戰爭を外に見て盛に商賣してゐる商人を目擊した。出征してゆく兵隊を見送らうともせず、商賣してゐるのを見た。又政變が

日本程直接には財界に影響を及ぼさないとも聞いた。彼等は平和的手段を以て、着々とその長所たる經濟的才能を發揮してゐるのである。占領された土地に於てさへ、經濟的實權を延ばして行くと云はれてゐるのも、彼等の長所である。

（ロ）工業に於ても同樣である。今は機械工業と家内工業とが共に行はれてゐるが、今後に於ては、彼等の獨特の技倆と、無盡藏の材料とを以て、世界の市場に望まんとしてゐるのである。云はゞ幼年期の工業國である。

（ハ）最後に農民を見るに、これは農業國たる以上、支那の大部分の民は農民で、人口八割におよぶと云はれてゐる位だ。彼等は唯人口が多いのみで團結がなく智識も低い。又經濟力も大して豐かでない上、年々天災にいためられるので大した事は出來ず、且つ鄉紳との關係より地主小作人となる向きも多い。しかし農民はあらゆる事に無關心なのだ。天災に對しても、天なり命なり、とあきらめて防禦もしない。又清國が民國にかはつた革命のあつた事にも全く無關心なので、天の命ずるまゝに人生を終るのみである。まれにはかゝる農民も、やゝ力を合して土匪となり、軍閥に反抗する事はあるが、大した事も出來ない。

世は進む。此の泰平（？）な支那農民界にも小作問題のおこる日が段々と近づいてゐるのであらう。

三、（イ）無產階級中で最も上位と思はれるのは苦力であらう。彼等は無產であり、無學である。しかし生れ乍らの巨軀を利用して、喫飯の爲に汗を流してゐるのである。彼等の人格は先づ認められてをらないといつてよからう。而も彼等は甘んじて（？）喫飯に汗してゐるやうにみえる。

近代思潮は漸次彼等に人格の自覺を吹込んでゐる。將來には必ず產業革

命がおこるのであらう。併し勞働黨と銘打つて中原に鹿を追ふ日は遙か霞の向ふにある樣だ。

苦力以外の大部分は無職遊民なのである。彼等の數は非常に多いし、又增加する事であらう。彼等は經濟的には穀潰しであり、政治的には天下の亂源となる厄介者なのである。

その經路を尋ねるに、官僚軍閥の腐敗を怒り、或はそのために財を奪はれて、憤慨のあまり遊民となるものと、天災兵變により財を失ひ、又過重な課稅に堪へずして遊民となるのである。

(ロ)此の如き遊民の內最も我々に取つて意外であるのは、兵士が第一等のやくざものに數へられてゐる事である。支那では『普通の體を持つてゐるものは苦力や職人になるので、働き嫌で他の仕事では食へないものが兵士になるのだ。』と云はれてゐる位だ。

かゝる怠者が軍閥に傭はれて私兵となるのだ。而して食はしてもらつて戰爭を待つてゐるのである。戰爭と云つても殆ど死ぬ事がなく、且つ又のんきにやるのだから彼等に取つては大した苦痛はない。その上に平素でも無賃乘車とか、無錢飲食とか、掠奪とか、凌辱とかを、公然見のがされるといふ特典がある。勿論彼等の給料は不渡りで、上官たるものが着服してゐるのだから、やかましく云はれないも道理だ。蓋し中華民國軍閥時代の一社會相だらう。

(ハ)兵士と異り土匪には一種骨のある、又社會的意義のあるものもある。今之を大別すると、

(1)掠奪を職業とする團體

(2)階級爭議の一形式

の二つに別ける事が出來る。

(1)は遊民の一部が結社を結び、彼等の生活の手段として集團の威力で掠奪の効果を増大せんとする、云はゞ掠奪專門の團體であるが、(2)に於ては生活手段の半面に於て、階級爭議としての意義を有するものである。前述の如く土匪は搾り取られる階級であり、無產階級である。又志を得ずして憤慨のあまり、土匪の中に投ぜるものも數多い。したがつて彼等は搾取階級に對しては、激しい反感を有してゐるのである。此の反感が發しては搾取階級から搾取することゝなり、人民の膏血を以て私服を肥やしてゐる官吏や鄉紳を襲ふのである。彼等は多く義賊を標榜し、均產を旗幟とする。而して時としては政治家のために利用されて、政治的色彩をおびるやうになるものさへある。

要するに專制と情弊で固つた現在の樣な支那の樣子では、搾取者に對する反抗形式として、地方民が土匪の群に投ずるのも止むを得ぬ事であるが、又一方無秩序で且亂暴な兵士よりも、土匪の方がましだと思はれる樣な社會も困つたものである。

(ニ)浮浪人中には無賴子と、任俠の徒との二種あつて、公正な政治を行はぬ政府は、人民の信賴を受ける事を得ず、任俠の手によつて無賴子の橫行を制止するといふやうな變態である。されば任俠には膽力あり、武藝の心得ある者が多いのは、我が國の封建時代と似た所もあるのである。

(ホ)俗俚にも、

『乞食三日すれば止められぬ。』

と云はれてある樣に、支那にも亦乞食が多い。

我々も北京の雍和宮等でなやまされたものである。しかも普通の子供が一寸した出來心から之をやる者もあると聞く。何れの國にもかゝる厄介者が絕えないものと思はれる。

（以上社會階級の概要は長野朗氏著『支那の社會組織』による處多し。）

前述の様に支那は社會狀態が健全でない。そのために外國人が危害をうけた事が多い。その理由から生れたのが、北京の公使館區域であり、天津其他の租界なのである。これは支那から見れば全く體面上の問題であるから、『返せ』といふのも無理はないが、外國人から見て政治的意味を度外視しても、支那はあの様な社會狀態であり、あの様に政府の力が弱いのであるから、『我々を保護する爲には、どうしてもこの様な治外法權の區域が必要だ』といふのも尤もな事と思つた。しかも公使館區域や租界は、支那人の要路の大官、富豪、さては又政治犯等に依つて唯一の避難所として利用されてゐるのだから、或は彼等から見ても必要な區域なのかも知れない。しかし首府の眞中に政府の力の及ばぬ廣い區域があるとは、もし私利をすてゝ眞面目に國の體面といふ様な事を考へる人があれば、慷慨するのも無理はなからう。

一方外交官として此の國に駐在するものにも、大きな不便がある。それは國を代表する政府がないのに、國を代表して交渉しなければならないからだ。北京政府の人々は、各部がそれぞれ自分の心から、外國とかけひきすることが多いそうだ。（双橋無電問題もその好例だと思ふ。）且つ猫の目玉の様に、朝夕に政變があるのだから、ウカウカ出來ない。加ふるに新聞等の輿論を傳へる機關さへも、お上の威光により御用新聞以外は、一切發行を禁止し、甚しい時にはその記者を殺す事さへあるそうだ。

『新聞記者としての生活もあぶないものです。我々も外國の記者だから縛られる様な事がありませんが、本國に打電した電報が時々沒收されてしまつて、通じない事がありますので、大切な事になりますと二三通も同じ

電報を打つ事があります。』

とは或新聞社通信員の苦心談だ。

今支那に於ける文化設備として最も著しく思はれるのは教育、交通の二つで、病院其の他の設備は至つて整つてをらない樣だ。國が廣く、人口が多いのだから、行き渡らないのはまだしもとして、國都においてさへ實にみじめなものである。

交通方面を見るに、街路は巾廣く眞直に設計されてある處等は、たしかに大國の俤を示してゐるのだが、形をこしらへてから、一度も修繕はしなかつたのかと思はれる程、凹凸が激しい上に、雨の日となれば全くの泥田である。一度、郊外へ出れば全くお話にならない。惡道の標本の樣に云はれてゐる日本から行つてさへそうであるのだから、未だ見ぬ歐米の道路と比較すればどんな氣持になるであらう。此の點に於ては、支那人は日本人以上にお金の使ひ方を知らないと云ひたくなる。

道路ばかりではなく、自動車にしろ、馬車、洋車にしろ、實にひどい。勿論運轉手の許可證といふ樣なものは必要がない。『車を買つて五六人も人をひき殺せばすぐ運轉出來る樣になります。』と運轉手は平氣で話してゐる。全くお安く出來てゐる人の命である。

汽車でもあまり大して當にならない。勿論國土の割には少ないが、その上半分以上は外國人の手に依つてつくられ、動かされてゐるのである。支那人のものであつても、交通の便に備へると云ふよりも、軍閥に利用される方が多い樣だ。且つ時間の遲發するやうな事は、何とも思つて居ない。命令一下で出發間際の汽車でも、乘客を下ろして軍閥に提供するのだそうである。

『今頃の戰爭では汽車を多く手に入れた方が勝利で、今や奉天軍でも南軍でも盛に汽車を徵發してゐます。』

とは北京出發間際に聞いた話である。

斯の如く一般的な交通機關でさへ、一私利のために使用され、輿論も泣寢入りとなることの多いのが、今日の支那狀態ではあるまいか。

且兵士であれば、乘車の際に賃銀を拂はないのが普通になつてあるのだ。汚はしい服裝をして一等車に乘込み、やかましく騷ぐ等は、外國人になんとも云へぬ不快を與へるものである。

船に於ても同樣だらうが、南船北馬の語にもれず、北部のみを見た我々には船についてはあまり耳にしなかつたし、又見もしなかつたが、支那人の所有であれば直に徵發される事を聞いたのみだ。今でも時々新聞で見るやうに『支那兵が我が汽船に乘込み、無賃輸送を交渉したから軍艦の力をかりて武裝を解除した。』といふ樣な事が平氣で行はれてゐるのだらうと思ふ。

教育も普及してゐないと、云つた方が早いかも知れない。勿論學校はある事はある。大學より小學校までである。それも設備の不備な點に於てはお話にならない。國立北京大學の理科實驗室の如きは、我が國の一寸氣のきいた小學校の實驗室にも及ぶまいと思はれた位だ。加ふるに戰爭のために經費が滯るので、時々休業のやむなきに至るそうだ。言論の自由がないのみならず、睨まれると職だけではなく、ほんとの首までもとられるそうだ。丁度訪れた時には北京大學校長は、亡命中で、どこに居るかわからないとの事である。其他の學校はおして知るべしだらう。且つ普及といふ事は思ひも及ばぬ事で、田舍はさぞかしこれ以上の不統一だらうと思はれる。勿

論、朝鮮の方が普及してゐるやうだ。

外國人の手に依つて經營されてゐる學校もあるが、勿論政府の學制の如きも斷行されて居らぬだらう。併し國立よりも、立派に經營されてゐる學校は二三あつた樣に思ふ。或は國立よりも外國人によつて建てられてある方が、信用ある學校なのではなからうかと思つた位だ。過言かも知れないがあまり無學の人が多いので、つい左樣に云ひたくなるのだ。南方の事はわからない。或は北方以上に外國人の力が入つてゐるのではないか、と想像するだけである。

昔には孔子も出てゐる。孟子も出た。而して我々もその思想によつて教育されて來たのだ。然るに今その本國を訪れて見れば、悲觀に近い樣な落膽を感ぜずには居られない。釋尊の出た印度へ行つても同じではないかと思ふと心細い。昔の儘の姿で殘つてゐると思はれるのは唯、牧民の徒と追はれてゐる民とである。

私は軍閥の支那を旅行したのである。不安な亂國の首都を訪れたのである。國としては日本以外には見た事のない者が、音に聞く無秩序の國を眼のあたり見るに及んで云ひ知れぬ意外の感に打たれたのである。

私兵制度は度々讀んだ事も聞いた事もある。しかし實際に見てゐる兵制とは、官兵（？）のみなのである。一種の私兵たる士族制度の時代さへ知らないのであるから、支那で想像も及ばぬ樣な兵士をはじめて見たのである。今一度、軍閥の規律ない傭兵の樣を書いて見よう。

我々の見た兵士の多くは、張作霖、張宗昌の軍隊であつた。が何一つ整つてゐない。ノラリクラリと歩き廻つてゐるのみで、上官と思はれるもの

にも敬禮をしない。且つ小さい子供までも金筋一本位はつけてゐる。伍長とか軍曹とか云ふのだらう。二等卒らしい者は殆ど見あたらない。唯軍閥の威に安んじてノラクラやつてゐるもので、苦力にも劣つた者達である。或は幹部連は知らず、市中の浮浪兵士を見てゐたから此の樣な考へになつたとも云へる。が、その採用法を聞いても、白痴か狂人でない限り、みな採用されるのであつて、徵兵官(?)とでも云ふ可き兵士が、小旗を手にして場末の盛場に行き、浮浪人をかり集めて來るのである。かくて彼等は銃をうつ事を敎はり、直に戰爭につれ出されるのである。されば兵士としての練兵は充分でない。云はゞあまり費用のかゝつて居ない兵士なのであるから、負傷したとて手當をしない。反つて生埋にして殺してしまつたといふ樣な話も殘つてゐる。上官にとつては其部下(?)を手當するよりも、新しい部下を傭ひ入れた方が經濟的なのだらう。日本人の頭では一寸考へられない事である。

此の樣な有樣であるから、兵士は一般人からも一向にたつとばれない。而も、自分でも苦力以下にもてなされて平氣なのである。左もあらう、苦力は自分の力で喰つてゐるのであり、彼等は徒に寄食してゐるのだから。而して月給が不渡りなので、やむなく止つてゐるの、或は月給を得たから敵軍の方へ鞍がへしたのといふ樣な話も、根も葉もない話ではなさそうな。且つ出兵の時でないと銃を持たさぬといふのも尤も至極だ。

北京で出征する軍隊にも出遭つたが、國民には一向に刺戟をあたへてゐる樣子もない。又一向に勇士の意氣が昇つてゐる樣にも思はれない。日本の田舍の中學生の發火演習の方が數十倍勇しく見える。

この樣な軍隊によつて守られ、又は亂されてゐる國民に比べて、日本の强そうな軍人には自づと頭が下るし、內地に居ては氣付かぬ國家の有難さ

が、ひし〳〵と肝に銘ずる。

扨て支那人は經濟的才能に於て、不思議な天賦を有してゐる民族である。一度支那に入れば實に色々な貨幣が發行されてあつて、單調な貨幣制度になれた日本人は大いにまごつかされる。

『支那へ行つて間違ひなく釣錢が取れると、もう一人前の支那通だ。』と聞かされて行つたが、なる程と思はざるを得ない。太洋（ターヤン）、小洋（シヤオヤン）、銅子（ドンツ）兒（ル）等と名づけられた銀貨銅貨より、各種の軍閥や銀行によつて發行されてゐる紙幣があるのだ。太洋一圓は小洋の一圓二十錢に當るといふ樣な具合で、且つ朝夕によつて相場が違ふのである。又都會に依つて、通用する紙幣は異つてゐるので、甲地で貰つた紙幣は乙地では反古紙にもならず、田舍へでも入れば銀貨でなければ通用しないとの事であり、更に奥へ入れば物々交換である。

此の樣に、支那は、貨幣史を一時に擴げた樣な複雜な制度であり乍ら、無學な苦力や車夫でさへ、上手に缺損のいかぬ樣に計算するのであるから感心させられた事も一度や二度ではない。而して如何な事でもすぐに『金をくれ。』といふのである。勿論面子（面子とは日本で云ふ面目といふやうな意味）を重んずる事もあるが、一寸した事ならば銀をやれば形をつける事が出來るとの事であるから、御し易いといふ點もあるが、經濟的天賦の一例ではあらう。

萬事が此の調子で、軍閥が戰爭しようとも、經濟人は損のゆかぬ樣に働いてをり、又戰爭とてもあまり不經濟な時には中止する事があるそうだ。『戰敗國民でありながら占領された土地の財界を占領する。』のも彼等の世界的に異例とされてゐる事であり、馬來地方はおろか新大陸までも出稼ぎ

に行つて、財界の實權を握り、入國を禁止される程に財界の脅威となつてゐるのも彼等である。

一面此の才能の變則的な發達と見るべきは、彼等の奸智と相俟つて、一攫千金に私利を增さんとの心より行はれる贋造貨幣である。彼等は安價な鉛、其他を以てたくみに贋物を造つてゐる。しかし其の普及(?)されてゐる事は、驚く程で一枚一枚銀貨をたゝきつけて受取らないと、贋物をつかまされるのである。その巧妙な手段は、一度その手にのつた者でないと、得心出來ない事と思ふ。

特に彼等の美風と思はれた事は、彼等は何れの國へ行つても大手を振つて自國の服裝で歩く事である。或は、之は彼等の服裝が最も都合よく出來てゐるからかも知れないが、一面彼等の習慣にも依る事と思ふ。試みに日本を見よ。現在では多く洋服の生活になつてゐるではないか。北京滯在中で洋裝の支那婦人といふものは、殆ど見受けられなかつた事は、一寸うらやましい事だと思はれた。若し日本服は不備だといふのならば、改良すればよい。朝に洋裝の長を說き、夕に支那服で散歩する。斷髮連は、よろしく支那に留學すればよからう。

次は彼等の食事である。支那料理にはつめたいものは、殆どない。自然と非常に衞生的になつてゐる。多くの人が一所に匙を入れるのは非衞生だと云ふかも知れぬが、又見樣によつては親しみを現してゐるものかも知れない。奉天に於ても氷屋のあつたのは、附屬地の日本街のみであつた樣に記憶してゐる。又街頭で食事を取る樣な細民ですら、あたゝかいものをすゝりながら食つて居た。

儒教、道教が如何程迄に生活に汲入れられてゐるかは、調べたいと思つた事ではあるが、不幸にして充分なる結果を得なかつた。或は事別けて專門家にたゞさなかつたゝめかも知れないが、唯その一端でないかと思はれたのは、黃道吉日を重んずる風と、文字を尊ぶ事、及び男女厠についてゞある。

たしか東安市場を歩いてゐた時の事だと思ふ。ふと見れば男厠のみあつて女厠がない。不思議に思ひ乍ら、しばらく行くと反對側に女厠を發見したのだ。これは日本では見られぬ所で、共同便所であれば大抵の場合一棟を二つに區切つて使用してゐるのであるに、これは又全く道の兩側に別れてゐるのである。『男女七歳にして席を同じうせぬ』國だからかとも思はれたが、或は厠の構造より來たのかも知れない。何れにしても男女を別つ思想によるものと思はれる。

次に比較的汚はしい道上でありながら、文字の書いてある書屑が落ちてない事と、落書の少い事である。或は落書されてある處を見なかつたのかも知れない。が日本の樣に至る處に眼につく樣には、書かれてないだけは事實だ。

又黃道吉日には、結婚とか葬式が數多く美々しく行はれる風も見受けたが、彼等の間に殘る傳來の遺風なのであらう。

孔子廟には數知れぬ石碑があり、又太祖神や、天壇のある國である。今日でも立派な信仰とは云へなくとも、儒教道教が彼等の生活根底に根强く喰入つてゐる事が覗はれる。が、唯皮相的な見學しかなし得なかつた結果、かゝるデリケートな問題にふれる事は、今後に於て儒教佛教キリスト教等の事情、歴史を研究した上の事にしたい。

扨て亂國の支那は、何時になれば治るのであらうか。此の不思議な國、支那は何時になれば謎がとけるのであらうか、立ち場によつて人々の經綸說は異つて居るであらう。が革命以來十五年、何故に一日として、完全な治平狀態がなかつたかといふに、その原因としては、版圖が徒に尨大で交通不便であつた事、及び貴族的專制の弊風など色々あらうが、その重な一つとしては、此の大版圖の人種が、(一部を除く外)同人種であつたゝめに、斷然と南北に分裂するを得ずして、唯、昔時の夢に魅せられて、中原の幻鹿を限りなく追つてゐるためではなからうか。利害、人情、言語等を異にする南北が、互に獨立して內治につとめ蒙古、西藏等の四圍の夷國も自覺して獨立し、互に刺戟をあたへたならば、支那も實質上に於て案外早く治つたのではなからうか。歐洲の癌として、自他共に許してゐるバルカン半島ですら、不完全とは云へ獨立國をつくつてゐるではないか。卽ち南北同族であるのが、現在支那の統一和平を遲らしてゐるものではなからうか。

隣家の亂脉は、假令一水をへだてゝ居るとは云へ、懷手傍觀すべきものではあるまい。支那をしていつまでも、不思議な國としておくのは、歷史的關係より見ても、地理的事情より云つても、日本人の名折ではあるまいか。今や此の篇を閉づるにあたり、同志諸君の奮起をまつ次第である。

『神が此の屋敷へ天降つてから七十五年たてば、日本あら〳〵すます、それから先は、唐、天竺までも、天理王の命といふ一手一ッの、かうめいをながす。』

とは日夜耳にしてゐる神のお言葉である。

『せかいぢう、みな一れつにすみきりて、よふきづくめにくらす事なら』

おふでさき（七號）のお思召に答へるために、

『このみちはうちもせかいも、へだてない、せかいぢうのむねのそふぢや』（同十五號）に向つての、第一歩を先づ隣邦支那に伸ばすのが我々の取るべき急務であると、深く信ずるのである。

八月廿五日	大連		大連		旅順行
八月廿六日	大連	發	八、〇〇		ホテル
	奉天	着	三、二三		滿洲布教管理所
八月廿七日	奉天	發	一〇、一五		列車中
八月廿八日	北京	着	一〇、一五		ホテル
八月廿九日	北京				北京滯在
八月	北京	發	五、四五		
	天津	着	九、四〇		
		發	一、〇〇		
廿日	濟南府	着	九、四七		列車中
		發	一一、一〇		
八月廿一日	青島	着	一〇、三五		ホテル
九月	青島	發	七、〇〇		
一日	濟南府	着	六、五〇		列車中
		發	九、五七		
九月	浦口	着	二、三八		

『このみちはうちもせかいも、へだてない、せかいぢうのむねのそふぢや』（同十五號）に向つての、第一歩を先づ隣邦支那に伸ばすのが我々の取るべき急務であると、深く信ずるのである。

鮮滿支旅行日程（大正十五年）

月日	地名	發着時間（細字午前 太字午後）	主要視察箇所	宿泊
八月十八日	大阪	發 八、二〇		列車中
八月十一日	下關	着 八、三〇	下關市中見物	
		發 一〇、三〇		
	釜山	着 六、三〇	釜山市中見物ノ上東萊溫泉ニ至ル	東萊溫泉
八月十二日	釜山	發 九、一〇		
	京城	着 七、〇〇		朝鮮布教管理所
八月十三日	京城		朝鮮總督府、博物館、慶福宮趾、祕苑、鮮人家屋等	朝鮮布教管理所
八月十四日	京城	發 一〇、五〇		列車中
八月十五日	元山	着 七、〇〇	元山市中、港灣	愛媛館
八月十六日	元山	發 一〇、一三		
	京城	着 五、五五		朝鮮布教管理所
八月十七日	京城	發 八、〇五		
	平壤	着 二、一九	平壤市中、牡丹臺	鐵道ホテル
八月十八日	平壤	發 二、三〇	午前中平安南道廳、樂浪遺跡、妓生學校	列車中
八月十九日	奉天	着 六、三〇	市中見物	滿洲布教管理所
八月二十日	奉天	發 九、四〇		
	撫順	着 一一、〇五	撫順炭坑露天掘、大山坑	
		發 三、四五		
	奉天	着 五、二〇		滿洲布教管理所
八月廿一日	奉天		總領事館、民國小學校、女學校、北陵	滿洲布教管理所
八月	奉天	發 三、三五		
	長春	着 九、〇〇		

八月二十日	撫順	着	一一、〇五	撫順炭坑露天掘、大山坑	
	奉天	発	三、四五		滿洲布教管理所
		着	五、二〇		
八月二十一日	奉天			總領事館、民國小學校、女學校、北陵	滿洲布教管理所
八月二十二日	奉天	発	三、三五		
	長春	着	九、〇〇		列車中
		発	九、五四		
八月二十三日	ハルピン	着	七、一五	ハルピン市中、沖横川兩志士碑、東支鐵道クラブ	北滿ホテル
八月二十四日	ハルピン	発	一〇、一〇		列車中
八月二十五日	長春	着	七、三五		對翠閣
		発	八、〇〇		
	湯崗子	着	三、三三		
八月二十六日	湯崗子	発	一〇、二七		
	大連	着	六、〇〇	大連市中、埠頭、星ヶ浦、滿鐵本社、碧山莊	大和ホテル
八月二十七日	大連				大和ホテル
八月二十八日	大連	発	一〇、〇〇	關東廳、白玉山、東鷄冠山北堡壘趾、博物館等見學ノ上自動車ニテ大連ニ歸ル	大和ホテル
	旅順	着	一一、一九		
八月二十九日	大連				大和ホテル
八月三十日	大連				老虎灘
八月三十一日	大連	発	一、一〇		滿路丸船中
九月一日	天津	着	二、〇〇	天津市中	大和ホテル
九月二日	天津	発	八、一〇	紫禁城、中央公園、北海永安寺	扶桑館
	北京	着	一一、一〇		
九月三日	北京			日本公使館、萬壽山、雍和宮	扶桑館
九月四日	北京			北京大學	扶桑館
九月五日	北京			天壇	扶桑館
九月六日	北京	発	八、一〇		列車中
九月七日	奉天	着	七、二五		滿洲布教管理所
九月八日	奉天	発	三、〇〇		列車中
九月九日	京城	着	九、四〇	朝鮮神社	朝鮮布教管理所
九月十日	京城	発	九、五五	京城女子公立普通、淑明女子高等普通、壽松公立普通、京城第一高等普通、京城醫學專問ノ五學校	列車中
九月十一日	釜山	着	九、三〇		
		発	一〇、三〇		列車中
	下關	着	六、三〇		
		発	九、〇五		
九月十二日	大阪	着	九、四〇		

鮮滿支旅行日程豫定表

（大正十五年）

月日	地名	着發時間（細字午前 太字午後）	摘要	宿泊
八月十日	大阪	發 八、二〇		列軍中
八月十一日	下關	着 八、三〇		
		發 一〇、三〇		
	釜山	着 六、三〇		東萊溫泉
八月十二日	釜山	發 九、一〇		
	京城	着 七、〇〇		朝鮮布教管理所
八月十三日	京城		京城滯在	朝鮮布教管理所
八月十四日	京城	發 八、一五		
	元山	着 四、一一		ホテル
八月十五日	元山	發 一〇、一三		
	京城	着 五、五五		朝鮮布教管理所
八月十六日	京城	發 八、〇五		
	平壤	着 二、一九		ホテル
八月十七日	平壤	發 六、〇〇		
	奉天	着 七、〇五		滿洲布教管理所
八月十八日	奉天		撫順炭坑行	滿洲布教管理所
八月十九日	奉天	發 三、三五		
	長春	着 九、〇〇		列車中
		發 九、五四		
八月廿日	ハルピン	着 七、一五		ホテル
八月廿一日	ハルピン		ハルピン滯在	ホテル
八月廿二日	ハルピン	發 九、二〇		
	長春	着 四、〇四		列車中
		發 一〇、三〇		
八月廿三日	大連	着 六、〇〇		ホテル
八月廿四日	大連		大連滯在	ホテル
八月廿五日	大連		旅順行	ホテル
八月廿六日	大連	發 八、〇〇		
	奉天	着 三、二三		滿洲布教管理所
八月廿七日	奉天	發 一〇、一五		列車中
八月廿八日	北京	着 一〇、一五		ホテル
八月廿九日	北京		北京滯在	ホテル
八月卅日	北京	發 五、四五		
	天津	着 九、四〇		
		發 一、〇〇		
	濟南府	着 九、四七		列車中

十九日	長春	發	九、二〇	
		着	四、〇四	
			一〇、三〇	列車中
八月廿日	ハルピン	着	七、一五	ホテル
八月廿一日	ハルピン			ハルピン滯在
八月廿二日	ハルピン	發	九、二〇	
	長春	着	四、〇四	
			一〇、三〇	列車中
八月廿三日	大連	着	六、〇〇	ホテル
八月廿四日	大連			大連滯在
八月廿五日	大連			旅順行
八月廿六日	大連	發	八、〇〇	
	奉天	着	三、二三	滿洲布數管理所
八月廿七日	奉天	發	一〇、一五	列車中
八月廿八日	北京	着	一〇、一五	ホテル
八月廿九日	北京			北京滯在
八月卅日	北京	發	五、四五	
	天津	着	九、四〇	
		發	一、〇〇	
	濟南府	着	九、四七	
		發	一一、一〇	列車中
八月卅一日	青島	着	一〇、三五	ホテル
九月一日	青島	發	七、〇〇	
	濟南府	着	六、五〇	
		發	九、五七	列車中
九月二日	浦口	着	二、三八	
	南京			ホテル
九月三日	南京	發	七、四〇	
	蘇洲	着	〇、五四	
		發	四、三一	
	上海	着	六、四五	ホテル
九月四日	上海			上海滯在
九月五日	上海			杭州行
九月六日	上海	發	八、三〇	船中
九月七日	長崎	着	一一、三〇	
		發	一、三〇	
	門司	着	七、四〇	
		發	七、五〇	
	下關	着	八、〇五	
		發	八、四五	列車中
九月八日	大阪	着	八、五八	

二日	南京			ホテル
九月三日	南京	発 七、四〇		
	蘇洲	着 〇、五四		ホテル
	上海	発 四、三一	上海滞在	
		着 六、四五		
九月四日	上海			ホテル
九月五日	上海		杭州行	ホテル
九月六日	上海	発 八、三〇		船中
九月七日	長崎	着 一一、三〇		列車中
	門司	発 一、三〇		
	門司	着 七、四〇		
	下関	発 七、五〇		
	下関	着 八、〇五		
	下関	発 八、四五		
九月八日	大阪	着 八、五八		

昭和二年十一月二十三日印刷
昭和二年十一月二十七日發行

〔非賣品〕

著作兼發行者　奈良縣山邊郡丹波市町大字三島二七一番地　中山正善

印刷者　奈良縣山邊郡丹波市町大字三島五四番地　辻豐彦

印刷所　奈良縣山邊郡丹波市町大字川原城三〇九番地　天理教教廳印刷所

578
7

令

2年12月23日

調査済

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black